

猪口邦子著「世界を読むー Book Review 1990 ー」筑摩書房、1990 年 7 月 5 日刊を読む

1. (1) 思えば、今日ほど多くの日本人がさまざまな国についての本格的な知識と情報を求めた時代はなかったと言えよう。長い鎖国のトンネルから抜け出した後も、諸外国の事情に通じる機会に限られた人々のものでしかなく、関心対象も極めて限定的であり、さらに戦前・戦中は情報鎖国が続いたのであった。戦後になって広く市民が世界を知る機会は増えたが、実際には海外に出向く経済的余裕や遠方の事情に思いを馳せる精神的余裕は得にくいことが多かったと思う。しかし、1970 年代の石油危機や不況を乗り越えるころから日本経済のグローバリゼーションが進んで世界各地との相互依存的関係が深まり、さらに 85 年以降の円高を背景に、かつてない規模で日本人が仕事、勉強、観光に海外へ出かけるようになった。多くの日本市民が世界各国について活発に知ろうとしているこの開かれた時代は、実際にはつい最近始まったばかりなのである。

(2) そんな時代に生き合わせた幸運を活かして、世界の国々についての理解を深めていきたいものだ。海外で活動するときは、便利な情報のみならず、その社会の状況や歴史に対するセンシティブィティ(感受性)が必要であり、水準の高い素養や奥行きのある知識を与える良書との出会いは、世界とのよりよい出会いを可能にしてくれよう。世界各地のニュースが幅広く伝えられるようになった今日でも、ニュースの奥で生成されていく新たな歴史を見据えていくのはやはり本を書く人と読む人である。

P.132

2. (1) 日本はいま、どのような未来を選択しようとしているのだろうか。

(2) 約 20 年前から、世界は戦後体制下のさまざまな矛盾を調整する局面に入ったようだ。変動相場制の導入、石油危機と南北対立の激化、戦後最悪の不況などに揺れた 1970 年代は国際経済の調整期であり、冷戦終結への動きが活発化した 1980 年代は国際政治の調整期であった。変動相場制への移行は米国のみが国際秩序の負担者となるシステムの矛盾を、南北関係の政治化は世界経済の底辺における矛盾を、そして冷戦克服は不毛な核軍拡の矛盾を調整しようとする試みである。

(3) そんな世界のなかで日本は大潮流から逸脱せずに、世界とともに歩む道を選択できるだろうか。70 年代の経済調整には的確に対応しながらも、80 年代の国際政治の調整期には戸惑い続けた日本。大国とは国際社会の調整を先取りできる国家を指すが、経済大国・政治小国の構図は、そのまま経済調整は先取りできても政治調整は逆に遅れるばかりという構図につながっている。冷戦の中に取り残されたり、ソ連に変わる世界の憎まれっ子になるような貧弱な立ち回りでは、経済を支えてきた勤勉な日本の市民があまりにも可愛そうだ。

(4)日本は、より先見性のある政治、よりバランスのとれた経済、そしてより生活者にやさしい社会を築き、世界に親しまれる国家として 21 世紀を迎えることができるだろうか。

P.216

[コメント]

現在、参議院議員、元少子化担当大臣の猪口邦子先生の 1990 年に発行された書評集「世界を読む」。日本の現状を把握した上で未来を考えるときに、腰を落着けた読書は欠かせない。社会のリーダー、特に国家や企業、人々運命を決する政治家や経営者、教育者にとって読書は大切。

－ 2013 年 5 月 29 日 林 明夫記－